

確か20年前、第一回の関東アコーディオン演奏交流会（コンクール形式による）が開催されたのは府中市民会館（現在の「ルミエール府中」）であったと思う。赤絨毯の大広間で独奏、重奏、アンサンブル、合奏の審査が7～8人の審査で朝から夕方まで目一杯行われた。独奏部門では現在のように各種部門はなく、シニアと一般部門ぐらいではなかったか。

私が指導する三多摩地域の各サークル・教室が当時5つあり、この創設以来、意識的に出場者を組織し、また運営への参加も積極的に行い、阿部真知子さん（故人／元三 AC）らがその実行委員会で獅子奮迅の活躍をしていた。もちろん私もこのコンクール審査には当初から参加してきたし、コンクール審査を委嘱された関東アコーディオン講師懇談会のメンバーとして実行委員会にも参加し、そのとりくみに深くかかわってきた。

創設の頃は、開催要項や審査要項、運営などにおいてまだまだ不整備で曖昧な点も多く、審査付きの発表会のような様相であった。その後、度重なる改善をへて今日のコンクールが築かれた。20年を経て、ようやく内外に誇れるシステムのコンクールに進化してきたと思う。また、関東地域を代表する、地方コンクールとしては全国で唯一のものとなった。

今年度、無審査希望を受け入れるという新たな制度の導入が行われたが、そんな曖昧なコンクールは辞退したいというケースも表れた。今後、さらに大衆的でかつ権威のあるコンクールとはいかなるものか、の論議をさらに深めていく必要があるだろう。また、当イベントに結集する参加者の意識レベルを高めていく努力も怠ることはできない。参加数の数合わせで出場しているとみられるケースもあるからである。

ともあれ、こうしたコンクールの積み重ねの中で、そこに結集する愛好者や団体の演奏レベルは確実に向上してきたことは疑いない。入賞者、とくに若者や子ども達の中から、プロを志向するものが増えてきた。

昨今、ピアソラブームあたりからか、プロ、アマを問わず、アコーディオンと一緒に演奏したいという要求が一般の音楽家や音楽愛好層のなかに増えてきた。この秋、私の関わる稲城アコーディオンサークルで、ある大病院の職員で結成されたブラスアンサンブルとコラボレーションする機会があった。稲城サークルの新人メンバーが同じ職場の楽器経験者を集めて、患者の慰問演奏活動をはじめた。一方、そのグループとコラボレーションしたいとの稲城サークルの申し入れが喜んで受け止められ、ある文化センターの祭りに出演となった。普段10人弱で活動しているサークルが、一挙に15人編成のアコーディオン&ブラスアンサンブルとなり、演奏も上々、客足も増えた。互いの音楽的感性が相互に刺激し合い、それぞれの意欲を向上させる。こうしたコラボ（共同制作）が新しい音楽的価値を生み出していく、一つの典型ともなった。また、よく見渡せば、職場、地域には音楽的技量を備えた、とくに若者達がかなり埋もれているという事実の発見でもあった。

「府中グリーンプラザ」の関東20周年記念コンサートの後、2010年2月6日には、偶然にもコンクール創設時の会場「ルミエール府中」の主催事業として、「ちょっとひといきコンサート in 府中」（アコーディオン・アンサンブル Air 主催）が同会場で開催される。